

前方には旅

船酔いが潮のようにこみあげてきた。慌てて僕は舷側へ飛び出した。口元を押さえた指のあいだから、噴水のようにさつきレストランで食べた中国料理が吹き出した。うねりのように噴水は幾度も吹き出し、吐き尽くした胃袋は痙攣した。目尻から涙が落ちた。

東シナの海は黒く波打っていた。水平線は沈黙の彼方に消えていた。雨が降っていた。雨は吐いた食べ物と胃液に汚れた手の平を流れ、髪の毛をしたらたり、涙とまざりあつて、Tシャツから胸元へと流れ落ちた。手すりにもたれて、酸っぱい唾を吐いた。レストランから漏れた明かりが黒い海に微かな影を投げかけていた。

低く、重たく持続するエンジン音のかたわらに腰を下ろし、闇の中に降りしきる雨を見ていた。

沈黙のことを僕は話そうとしたのだった。

乗船の数日前、泉大津市南冥寺の本堂で、夕刻。一〇人前後の聴衆の前でひとつの詩を朗読したあと。沈黙に直面するというこの意味を、僕は話したかった。告発が内包する沈黙。告発として沸騰する言葉、沈黙への臨海に踏み止まりながら、かろうじて屹立する言葉としての沈黙。告発に直面する一個の沈黙として。

南冥寺の境内に日は暮れ落ちて、本堂の縁側で、友人のフォークシンガー、廣石雅信や阪上正人と言葉を交わした。本堂では若手講談師が聴衆をわかせていた。南冥寺境内の湿り気を帯びた空気や微かにざわめく木立を僕は見ていた。ふと、さつき聞いた阪上正人の唄の一節が情景をよぎった。

♪いくらでもいくらでも命使い果たそう

僕はこれですべての仕事に一応のケリをつけたことになる。少し心もとなく、少し寂しく、また少しだけ自由の感触を感じながら、夕闇の中にいた。すべての仕事、価値関係、また友人関係などに一応のピリオドを仮設すること。旅は全ての日常関係をカッコに閉じる。もちろんそれは幻想的なことに違いないのだけれども、もう一度裸の自分に戻り、もう一度生きるこの意味に立ち返る。裸の命の姿に戻っていく。

♪いくらでもいくらでも命使い果たそう

まるで遺言のように、僕は頭の中で唄の一節を繰り返していた。白昼の明かりは少しずつ落ちていった。ひとつまたひとつと電灯が消されていく。僕の中のどこかでにぎわいがひとつまたひとつと消えていく。

東シナの海は荒れていた。夜は均質の闇ではない。均質の国のまさしく外海なのだ。

また、噴水が来る。

*

四月二十九日、午前十一時。海も、空も、一面の白い霧の中だ。昨夜の船の揺れは嘘のように、今あらゆるものが白い霧の中をおだやかに流れている。

缶コーヒーを飲み、煙草を吸いながら、流れる白い霧にぼんやりと思いを漂わせていた。船酔いは遠ざかり、僕の中を漠然とした郷愁と期待が交差していた。

旅立という儀式には船は悪くない。比較的自由度の高い、宙ぶらりんの空間、少しずつ析出されてくる郷愁の感覚とそれに拮抗しつつ水位を増してくる未知への不安と期待感、それらに適合した日単位の時間性。

やがて、立ちこめた霧は少しずつ晴れて、空はうす曇り、水平線は靄にかすみ、黄土色の海面が現れた。時おり、停泊した大型船の脇を船は通り過ぎる。見渡しても陸地の影も確認することはできないけれども、確かに中国大陸はもう目と鼻のさきだ。この黄土色の海は、かの長江（湯子江）が大陸のそここから削りとり、その流れとともに運んできた黄土を河口でいつせいに吐き出したものなのだ。デッキの手すりにもたれながら、僕は一心に黄色い海と、やがてもうすぐにも大陸の影が姿を現すだろう水平線とを見ていた。

前方には、旅。

やがて、ロビーに長テーブルが二脚並べられ、服務員たちがゆつくりと入国検査を始めた。あつという間に、長蛇の列。飛び交う中国語。それはまるで長い退屈な航海というまどろみから突然目覚めたかのような雑踏だった。僕もまた漠然とした物思いというまどろみから目覚め、新しい現実（中国大陸）への上陸のための手続きの後尾についた。

黄色い海はやがて黄色い大河（長江）へと接続し、船はさらにその支流、上海市東部を流れる黄浦江へと至り、やがて接岸。

降船用の階段が舷側にセットされる。漠然とした待機の感情が具体的な行為としていつせいに乗客たちに感染する。まだ開かない出口に殺

到する中国人たち。我先にと、一步でも人より先にと、列に割り込み、出口に手をかけ、背後から覗き込み、背中を押す。大声で制止しようとする
服務員。

フン詰まりのような出口の混雑に僕もまた突入し、彼らの大きな鞆や、
体臭にもみくちゃにされながら、ポロ雑巾のように、ぽととと降船用の階
段に出た。

赤いネッカチーフを首に巻いた少年少女たちの楽隊が埠頭で賑やかな
音楽を奏でている。途中に乗船してきた鹿児島県川内市の訪問団に対す
る歓迎なのだった。少年少女たちの音楽と中国語の歓迎の声にはさまれ
て、川内市の人々はニコヤカに進んでいった。中日友好万歳！

無数の中国語が立っていた。

人にあふれた埠頭のそこそこに、来た人、迎える人、カモを物色する人、
ただの見物人、店員、宿の客引き、あらゆる人々でごった返す待合室に、
無数の中国語が立っていた。上海港に上陸した瞬間に、僕は友人、高粱法
の言葉を理解したのだった。

いつだったか彼は中国の音楽を評して、ひとつひとつの音がキンキン
と立っている、と言ったのだった。そのとき僕は京劇の節まわしを思い出
して、軽く相槌を打つただけでも、まさか普通の中国語の歌や会話が
立つわけではないだろうと思っていた。だが、今僕が見ているのはまさし
く語のひとつひとつが立っている中国語なのだった。その意味はかいかも
く分からないのだけれども。

たぶん中国語は語の堆積なのだ。そう言えば、NHKのラジオ中国語講
座の講師も言っていた、中国語は積み木のように単語を積み上げていく
のだと。語の音が意味であり、その堆積が会話なのだ。それに比べると日
本語は語そのものよりもむしろその流れが意味をつくり、会話をつくる。
日本語が流れそのもののに比べると、英語はむしろ流れのアクセント
であり、強弱、リズムだ。そしてたぶんこれらの言葉の特徴があらわにな
るのは、言葉が会話として、意味として現われる場ではなくて、音として
現われる、例えば雑踏なのだろう。

上海港の雑踏に降り立って、僕はその瞬間の異国に立ちつくしていた。